

フツの会社員だった僕が青山学院大学を箱根駅伝優勝に導いた 47 の言葉

原 晋 著

単行本：215 ページ

出版：アスコム

価格：1300 円（税抜）

はじめに

故障により陸上競技の世界から一度お退いた筆者でしたが、数年後には営業マンとしてその才能を最大限に発揮します。その後、念願だった陸上競技部監督として白羽の矢が立ち、ついには青山学院大学を箱根駅伝常連の強豪校へと育てあげました。実は、営業時代に培った数々のビジネスノウハウの活用が監督としての成功には欠かせないものだったのです。

エースを育てよ、エースに頼るな

強く優秀なチームを作るためには「一体感」と「緊張感」が必要だと筆者は述べています。就任した当初、特に重視していたのは一体感を高めることでした。しかし、優勝を経験するほどにチームの実力が高まると、一体感の割合を減らし逆に緊張感を高めることで、ただ仲良しなだけではない切磋琢磨するチームづくりへと方向を転換しています。

その段階に到達した時に、他の選手の競争心を駆り立てチーム全体の質を向上させるためにエースという存在が必要になります。ただ、エース一人に頼っていると思われぬトラブルなどによって簡単にチームが崩れてしまいます。優秀な選手がいればこそ、お互いに競争心が生まれ、結果としてそれぞれの自主性によって本質的に強いチームが構築されていくのです。

「チャライ」は最高のほめ言葉である

普段からチャラチャラしている人にはほめ言葉になりませんが、青学の陸上競技部の選手は普段、練習も勉強も真面目に取り組んでいます。そういう学生がジョークを飛ばせるというのは、表現力が豊かということです

本書の中で述べられている筆者の言葉です。やるべきことをやりながらも、自身の個性的な面を隠すことなく発揮できるということに意味があります。

青山学院大学のカラーの 1 つに「華やかさ」があると筆者は考えています。真面目一辺倒では、雰囲気は硬く窮屈なものになり、本来の実力を発揮できないチームになってしまいます。たまに見せるチャライ一面こそが緩和剤となり、メンバー一人ひとりが伸び伸びと自分自身を表現できる場になるのです。

たとえ話のネタ帳を持って

選手たちのモチベーションを上げていくためには、やはり言葉によるコミュニケーションが不可欠です。

陸上界でよく使われる用語を使って指導するよりも、選手が興味を抱く話題にどう置き換えて、分かりやすく説明するか

筆者はこう考えており、そのためにたとえ話のネタ帳を持っているといいます。モチベーションアップのスイッチとなる言葉は人によって様々です。

「新入社員に業務の指導をする」という会社内の一場面に置き換えてみても、相手の興味・関心により近い言葉を用いることが出来れば理解度や仕事に対する姿勢に変化が見られるでしょう。

チームというのは当然ながら多くの人が集まって作られるものです。しかし、数の多さに甘えて一人ひとりの実力を向上させる取り組みを怠れば、むしろ生産性の悪い厄介な集団になってしまいます。

強固で自主性に長けたチーム作りを目指している方におすすめの一冊です。